

難民支援プロジェクト

3 誰も“生きがい”や“希望”が必要だ



2002年春に開始した青年センターの建設が完成に近づくと



ワークの現場に集まることもまた

キボンド難民キャンプでの古着配給

私が滞在中に配給があったのは、カネンワキャンプ（4,848家族）のみだったが、それでも2万人近い人口への物資配給作業は大掛かりで何度も実施するのは大変なことなので、古着だけでなく生活用品（バケツと調理用鍋）も一緒に配給された。

1家族にバケツ1個、調理用鍋1個一人につき古着1枚

家族の一人が代表で物資を受け取りにくる。配給カードにパンチで穴をあけられた後（配給を受けたというしるし）、家族数に応じて物資が手渡される。古着は、男も・女も・子ども用、とかなりおどろき

に分類された山から手渡されるため、適当な種類やサイズのものも渡されないことが多い。配給所を出ると、外では難民どうして古着を交換している。

新しい服が配られることで、通学率アップが期待される。適当な服を持っていないがために、学校に通うことを嫌がる子どもも多い。特に女子生徒は、学校に来て行く服（ポロシャツではない適当な服という意味）がないために、学校に行かないことが意外に多い。

厳しい食糧配給事情のため、ほとんどの難民が一日一食のみという現状で、栄養状態は決してよくない。（中尾佳織、2003年2月18日）

ノリアキ記念青年センター

わかちあいプロジェクトのスタッフとして活動中、2001年7月7日交通事故で亡くなった高村憲明さんが、建設を計画したセンターが完成まじかになりました。

「キャンプの人たちが語る彼は、陸上競技の好きな、静かな青年だった。毎日15キロのランニングに動んでいた。そして二つの夢を語った。

キャンプに、若者のための文化活動センターと、陸上の400メートルトラックをつくることだった。」（朝日新聞、2001.8.10）

第11回 2003年度古着支援報告

古着の支援ありがとうございました

昨年引き続き、タンザニアのキボンド難民キャンプを中心にエリトリアまた、新しく、ザンビアとスワジランドにも支援いたしました。

◎支援先:

- キボンド難民キャンプへ410フィート
- コンテナ3本と20フィートコンテナ1本
- エリトリア難民へ40フィートコンテナ1本
- LWFザンビアへ40フィートコンテナ1本
- スワジランド赤十字へ40フィートコンテナ1本
- ◎寄付古着: 6,423個
- ◎募金額: 8,609,505円 (8月末現在)
- ◎募金口数: 2,206件

古着支援の流れ



日本で集められた古着



難民キャンプに運ばれたテント倉庫内



キボンドの中島さん



配給を受けるためのIDカード



家族の代表を受け取る



さっそく試着する

スマトラ農村開発プロジェクト

4 自立に向けて



リスケルさん、杉山先生、宇野さん



リスケルさんが指導する糸紡ぎ講習会

ウロスと綿花栽培プロジェクト

宇野 仰 (スマトラ事務所代表)

わかちあいプロジェクト、スマトラでは昨年より綿の栽培を無農薬で進めています。現在海沿いの町シボルガかというところで土地を借り、担当のリスケルさんと地元元農家と協力しながら、綿を育てています。昨年はシボルガの教会の土地を提供していただき、試験的な栽培を試みましたが、順調に生育し綿を取ることが出来たので、新たに近くに土地を借り本格的な栽培に取り掛かりました。今回の土地は広さが1ヘクタールほどあり、平地と斜面で構成されています。平地に綿を植え、斜面には芋・ナス・チリなどを育てています。インドネシアでは無農薬栽培を行っても市場での販売価格は変わりません。しかしわかちあいが支援しているリントンのコーヒー栽培は無農薬で行われており、国際市場を考慮しても無農薬栽培が重要な役割を担っています。無農薬についての知識がインドネシア国内では乏しいため、以前日本のアジア学院（栃木県西那須野）でトレーニングを受けたウェスリーさんが開校したトレーニングセンターでリスケルさんは1週間の集中講座を受けました。

また現在チェンマイ大学で教鞭をとっておられる杉山信太郎先生に直接シボルガに来ていただき、アドバイスをを受け、綿と綿の間に豆を植え

などの工夫をして病害虫を防いでいます。今回の綿の栽培にあたって、無農薬の綿を中国で栽培して商品化している綿益久染織研究所の廣田益久社長から種を提供していただきました。中国産の白い綿と、グアテマラ産の茶色い綿です。中国産のものは問題なく発芽し収穫に至るのですが、グアテマラ産のものは廣田社長の話によると「もし収穫できたら大成功ですよ」とのことでした。そこで駄目でもとものつもりで、まずは標高が900メートル、わかちあい・スマトラのあるタルトゥンの事務所の裏に播種したところ4ヶ月ほど経って見事に結実。シボルガは海沿いで高温多湿なので、ここでは成功しないだろうと思ったら嬉しい誤算で大成功。地図で見るとグアテマラと北スマトラの緯度がほぼ同じところからこんな結果になったのではないかと考えています。

シボルガでは、無農薬栽培をするために豚と鶏を飼育しています。それぞれの糞を使って堆肥を作り、生育した豚、鶏、卵は現金収入となりなります。現在豚は10頭、鶏は70羽を育てています。また近くの農家にも豚と鶏の飼育を委託し、同時に綿の栽培も行っています。先に述べた斜面の作物はこれら動物たちを育てる目的を持っています。豚が子供を産んだらさらに近隣の農家への委託を拡大する予定です。豚と鶏を使ったこの計画が軌道に乗れば、

シボルガでまとまった量の綿を生産することが出来るようになります。さて、綿を収穫した後それを糸にしなければなりません。戦時中日本から輸入されていた綿織機と糸生産の技術は戦争が終わると共に廃れてしまいました。農家のお年寄りも聞いても上手く糸を捻(よ)ることが出来ません。そこで10月にリスケルさんは、インドネシアで綿を育てて見せる布を携えて3週間シボルガへ糸作りの勉強へ出かけました。有名なバリ島の近くです。約2週間の糸作りと、草木染の勉強を終え、シボルガの綿をタルトゥンのシモランキルという村に運び込みました。シモランキルでは北スマトラ独自の織物ウロスが作られています。

写真はリスケルさんが村の人たちに糸紡ぎの技術指導をしているところです。ウロスは北スマトラのバトゥ族が冠婚葬祭、記念式典などに出席する際に肩からかけて使う幅60センチ、長さ2メートルほどの織物です。このウロスの技術を生かして綿で布を織り、糸または布を染め、オリジナル商品を開発すれば地域開発の一端を担うものになると考えています。リスケルさんは将来の展望として、無農薬で難民たちに農業を指導するトレーニングセンターを開校したいと強い意志も持っています。どうぞ綿花栽培プロジェクトをおぼえ、応援してください。